〈新刊紹介〉

田中雅志編・訳・著
魔女の誕生と衰退――原典資料で読む西洋悪魔学の歴史――

（三交社、二〇〇八年、三一九頁）

田島篤史

本書は古代から近世末までの悪魔学文献を集めた邦訳史・資料集であり、「魔女という概念が西洋で萌芽し衰退するまでの過程を、原典資料をつうじて読み解」くと同時に、「西洋悪魔学の歴史を通覧」（一頁）しようとする試みである。六章構成のうち、前半では古代・中世に、後半では近世に書かれた悪魔学に関する主要な著作を採録している。また第五章では一六―一七世紀に大量処刑をもたらした魔女裁判に関する史料を取り上げている。

まずは史・資料集というその性格上、採録されている史料はいかなる意図により収集されたものであるか、との観点から評することにしたい。はじめに魔女狩りの時代の書物からみていこう。この時代には多くの悪魔学に関する著作が書かれたが、その中でも著者がもっとも重要視しているのが『魔女への鉄槌』であり、曰く「悪魔学最大の古典」（九四頁）であるという。この書は聖俗両権力から認められ、他の悪魔学文献にくらべて出版部数が多く、また後世の悪魔学者たちに引用され続けた、というのが採録にあたっての根拠であり、これらはほぼ通説でもある。その他の重要文献として、ボダン、ジェームズ六世、デルリオ、レミなどの魔女迫害論者の著作が収められている。これらの書物も、これまで魔女狩りの歴史の中でしばしば論じられてきたものである。その一方で、ヴァイヤーをはじめとする懐疑論者の作品も採録することにより、本書は近世における明暗の両側面を見事に描き出している。

では魔女狩りの時代以前の作品は、いかなる観点から集められたのであろうか。たとえば『司教法令』や『対異教徒大全』、パリ大学神学部による魔術の糾弾などは、後の魔女狩りの時代に論争の的になったり、権威として引用されたりしたため、悪魔学史上重要であるという。また『ディダスカリコン』などは教科書として使われていたということから、一二世紀の学生の魔術観について知る格好の史料であろう。

このように明確な意図のもと採録されたものも多いが、一方でそれが不明瞭な作品も多数存する。たとえば、第一章で取り上げられている『オデュッセイア』や『エポドン』などがそうであり、著者によればこれらの作品には、「悪しき魔法使い、空中飛行、変身、嬰児殺

し、人食いといった、近世の魔女像につうじる何らかの属性がうかがえる」（一〇頁）ということである。また「近世ヨーロッパにおいては、あらゆる学識は聖書と古典古代の文献とに基づいていた」（一〇頁）ため、後の時代の魔女狩りを論じる際、これらの文献を取り上げる意義があるというのだが、これらの書物が後の時代の魔女狩りにいかなる影響を与えたか、その具体的な事柄に関しては述べられてはおらず、本書を通読する限りでは両者の関係は曖昧なままである。また、宗教改革者を代表してルターのみを取り上げているが、ルターに関してはかなりの数の著作が残されており、初期のものと晩年のものとではその魔女像も多少ことなっているため、ひとくちにルターの魔女論として紹介するのは問題があるように思う。

次に著者自身の議論をみていこう。著者は一五世紀を悪魔学史上の分岐点と考えており、「悪魔と結託した魔女の集団」が文献にあらわれはじめる時期とする（七四頁）。また、ここで登場する魔女像がなにゆえ生み出されたのかとの自らの問いにたいして、コースとピータースに依拠し、一四―一五世紀にヨーロッパを次々と襲った大飢饉やペストなどをはじめとする社会的緊張および印刷術の普及を副因にあげつつ、直接的な原因として、当時の神学者たちの教会や信仰生活の改革への強い思いと、それが失敗することへの恐怖であると答える（七四―五頁）。しかし、この回答はやや漠然としすぎており、実証するのは困難であろう。さらに魔女迫害を終息させたのは「人々の心性の変化」（二四八頁）である、とこれまた漠然とした答えである。また、この回答についてもスカールとカロウに依っているため、当分野で新たな研究成果を期待する読者には、多少の物足りなさを感じさせるだろう。

翻訳についても述べておかねばならない。著者は「魔女という特異なテーマについて理解するには……理解の礎となる一次資料を読み解くこと」なしには困難であると主張するが（一頁）、本書で取り上げられている四四項目のうち、わずか四項目ばかりが原典からの訳出であり、そのほかは英訳などからの重訳であるか、他の研究者による既訳の掲載である。この事実は本書の学術的価値を損じるものであり、とても残念に思う（著者もそれについては、断りを入れているのだけれども）。しかし、多くの書誌情報のため、本書から原典までたどることはできるので、悪魔学に興味をもつ読者にとっては、ビブリオグラフィーとしての十分な利用価値があるだろう。

冒頭でも述べたように、本書は悪魔学を通じてヨーロッパ精神を読み解こうとする試みであり、わが国においてはこれまでほとんどなされてこなかったことである。その点に関しては、誰もが評価を惜しまないことだろう。さらに取り扱っている時代・地域がこの上なく広範なこと、また図版が豊富に収録されていることからも、本書は入門書としては非常に良質であるともいえよう。本書の公刊をもって、今後わが国における悪魔学研究の裾野がさらに広がることを、評者もささやかながら願う次第である。

（関西大学大学院文学研究科・博士課程前期課程）